

デス・エデュケーション（生と死の教育）について

——親鸞の立場から——

田 代 俊 孝

高齡化社会や、終末患者に対する死の告知の問題など、現代社会においては、生と死の問題が不可避の課題として、われわれにつきつけられている。

しかし、そのことは、もともと仏教の出発点としての課題であった。ゴータマ・シッダールタは、生・老・病・死の課題から目覚めて仏陀・釈尊となつて行つたのである。仏教は生死・出離を目的とし、釈尊は、その迷いから解脱し、大衆を救つて行つたのである。その意味で、仏教とは、正しく、いかに死に、いかに生きるかの教育、つまり、デス・エデュケーションにはかならないのである。同時に、そのような立場での仏教の再生が社会的に要求されているのである。

二

すでに、『同朋仏教』第二十三号にて詳述したが、現代人の死あるいは生命に対する見方を筆者は、次の三点でとらえている。

第一に、生命がモノ化している。人間が経済的価値で測られたり、システム化され、人間がモノ化している。また、一方では、モノが、機能化、ロボット化し、人間化している。その結果である。

第二に、死（生命）からの逃避と、タブー視。日本には、葬式から帰ると塩をまく習慣がある。——真宗門徒には、本来、それがなかったが、今では習俗として行っている。——つまり、死を忌み、きらいタブー視、もしくは拒否しているのである。肉身の死は、死と生について、考える最高の場である。それゆえ葬儀は僧侶が司つてきたのである。——しかし、実際には儀礼化し、そうならない。——身近かな死は、死を拒否し、タブー視しているわれわれに、生命が常で

なく、必ず死に行く身であることを、ことばなくして教えていく。そこに生への問いかけがある。

第三に、生命の私有化、所有化である。人間は本来、自分の意志で生まれてきたのではない。生命は、私の意志以前に存在する。しかし、それを自我のめざめとともに、私有化する。生命を自我の思いの中に入れ、その結果、生命の長短すら自在になり、自分の意志で決まるものと思ひこんでしまう。

結局、このような状況の中で、死の課題が忘れられていく。死を問うこと、つまり、あすありともわからぬ命に目覚めて行くことは、逆に充実した生を得ることである。

同時に、いのちの尊厳にめざめることは、人權、平和、福祉など、あらゆる人間にかかわる問題の根本になって行くのである。

三

仏教は、いのちにめざめ、死をこえて行く教えである。釈尊の初転法輪にすでにその原理が示される。四諦、八正道、三法印の教えである。つまり、そこでは、苦の認識と、その原因が執着であるとの立場に立ち、諸行無常、諸法無我、涅槃寂靜と説かれる。

すなわち、そこでは、無常の自覚から、生に対する執着を離れ、無我を自覚し、因縁所生にめざめて行くことを基本的

立場とする。

このことを出発点に、仏教では、生死を超える道が種々に展開されてきた。

まず、死そのものを『勝鬘經』には、

二種の死あり。何をか二と為すや。謂く分段死と不思議変易死なり。分段死とは謂く虚偽の衆生なり。不思議変易死とは謂く阿羅漢と辟支仏および大力菩薩との意生身乃至無上菩提の究竟なり。

と二種の立場で認識し、そのうち変易生死の立場を不生不滅、無生無滅、あるいは生死即涅槃という立場で展開して行く。

つまり、大乘仏教では、「即」という立場で、実体化した生死観から、そのとらわれを離れた主体的な立場への転換を示す。そのことによって死を超越していったのである。

四

唐の湛然が『止観大意』に

衆教の諸門、大いに各四有り。乃至八万四千不同なり。並べて無生をもつて、首となさざること莫れ。今、且に初従り、無生門において偏に諸惑を破す。

と、言うようにいかなる仏教も、生死出離を究極の課題とし、無生という立場において、それを越えていった。

しかし、その中でも、特にそのことを直接の課題とし、正面から取り上げて来たのはその名が示すごとく浄土教である。

紙教に制限があり、充分述べられないが、曇鸞の『浄土論註』における「無生の生」、善導の『観経疏』における「凡夫得忍」つまり「無生忍」の自覚、あるいは『観念法門』にとかれる「入道場及看病人法用」、さらに、源信の『往生要集』における「臨終行儀」や「臨終来迎」、法然における来迎から摂取不捨への展開、親鸞における「現生正定聚」という展開の中にその生死出離の伝統が見られる。特にこの中で、死後の救いを述べることによって、消極的な死の受容を意図する臨終来迎の立場から、現生における死の超越という積極的な立場への展開が大きな意味をもっている。

五

すなわち、親鸞は、従来の浄土教の未来救済の立場に対して、現実生活での救いの確証を述べる。つまり、『大経』に説かれる「即得往生住不退転」を

即得往生^③というは、即はすなわちという。ときをへず、日をもへだてぬなり。

と示す。ここでは、即を即時の即、「ただちに」との意にも解釈している。

それは『教行信証』『行巻』の

即の言は願力を聞くに由って、報土の真因決定する時趣の極促を光闡せるなり。

デス・エデュケーション（生と死の教育）について（田代）

の解釈にも示される。

つまり、死後ではなく、名号を聞いて、信心を得たその時、現在生において、念仏した時、正定聚不退転に住すというのである。

次に、即は、即位の即、つまり「つく」と解釈される。正定聚につくとは正定聚の位につくという意であり、正定聚の菩薩と同じ位につくことである。

結局、信心を獲たものは、現生に正定聚の位につくということになるのである。親鸞は『愚禿鈔』に、そのことを「必定の菩薩と名づくる也」と述べている。また、さらにその現生正定聚の救いを『大経』によって、等覺の菩薩、つまり弥勒と同じと述べる。

もとより、これは、本来、第十一願に願われているところである。しかも、その意図を『如来会』の「若しまさに生まれん者」というところに確かめていることは、周知のとおりである。それに基づいて『一念多念文意』には、

それ衆生ありてかのくにむまれむとするものは、みなことごとく正定の聚に住す。

と述べられる。

かくして、信心獲たものは、現生に、諸仏に等しい、補処の弥勒に同じと言われるのである。

もとより、それが親鸞の独善ではない。「行巻」に示され

るように、龍樹の「即時入必定」（『易行品』）、曇鸞の「入定聚之数」（『浄土論註』）の理解に基づいているのである。

正定聚とは、往生という救済の自覚をうることである。それが、死後であるとするならば、現実生活は、永遠に救といは無縁のものになる。現実生活と関係のない宗教は、普遍宗教ではない。現実生活の苦悩を救済してこそ、宗教の意義があるのである。

死ぬのは死ぬ時でも、死の問題は、生きている時に解決しておかねばならない。現生正定聚でなければ無意味である。

臨終をいのり、臨終に正念して来迎を求めても、死にこだわるとらわれるだけである。生きている時に死の問題を解決してこそ、死のとらわれをこえ、真に人生が充実してくるのである。死の問題をこえと、死の不安がなくなる。長くてもよし、短かくてもよしとタンタンとした人生になる。死を宣告され、死を解決した人が、以後、充実した人生を送るのも、この立場である。死を実体化することなく、固執することなく、あるがまま、なすがままの自然法爾の心境にて、死そのものがどうでもよくなる。なぜなら、すでに往生するところが約束され、無生の生に立っているからである。

もともと、善導のことばである「前念命終、後念即生」を親鸞は、

本願を信受するは、前念命終なり。

「すなわち正定聚の数に入る」（論註）

「即の時必定に入る」（十住論）

「また必定の菩薩と名づくるなり」（十住論意）
即得往生は、後念即生なり。

と理解する。

前の念仏にて、自力つまり、エゴに基づく固執した命を終え、後の念仏で他力の生に生きる。つまり、無生の生、生死をこえた世界に生きると親鸞は理解する。

六

ところで、このような立場を、親鸞は、善導の「横超断四流」（『観経疏』）の言によって確認する。

もともと、このことばは、『大経』によっている。『大経』では、悲化段において、「過度生死」の課題を横に五惡趣を載りて、惡趣自然に閉じんと説き、さらに

極長生を獲べし、寿樂極まりあることなし

と、教える。ここから、善導は、上述の言を展開する。

さらに、親鸞は、

断と言うは、往相の一心を發起するがゆえに、生として当に受くべき生なし。趣としてまた到るべき趣なし。すでに六趣・四生、因亡じ果滅す。かるがゆえにすなわち頓に三有の生死を断絶す。

かるがゆえに、断と曰うなり。四流はすなわち四暴流なり。また、生老病死なり^⑧。

と釈する。無生に目覚めるのであるから、六道も四生もない。つまり、生も死もない。無生無滅である。その意味では、現在における獲信の内景である。決して、未来に得る境地ではない。しかし、自らの肉体は現存す。それゆえ、肉体の死、つまり、「臨終の一念に大般涅槃を超証す」、つまり、必ず往生するとの確信において、現在に、その利益を獲るのである。現在においてすでに死が先驗されているのである。正しく、それは「信に死し、願に生きる」(曹我量深)のである。救いが現在に成就するのである。

浄土は、実体的に見る世界ではない。浄土は「過十万億仏土」(『大経』・『小経』)である。しかし、「去此不遠」(『觀經』)である。人間の思い、分別が破れた時、足下に浄土が見えてくる。それは、浄土が確証されてくることである。親鸞は、現生正定聚につくことを「往生す」あるいは「往生を得」とさえいう。また、『末灯鈔』には、

信心定まるとき、往生また定まるなり^⑨

という。それは信心によって往生することが確証されとの意に受けとるべきである。どこまでも「必至」の立場である。

なぜなら、「証卷」には、

正定聚に住するがゆえに必ず滅度にいたる^⑩

デス・エデュケーション(生と死の教育)について(田代)

と言われる。また、上述のごとく「弥陀と同じ」「必定の菩薩」といわれる限り、現在に救われているが、仏ではない。もちろん、成仏が必至に確証されているが……。そのあり方を、親鸞は、

この身こそ、あさましき不浄造悪の身なれども、心はすでに如来とひとしければ如来と申すこともあるべしとしらせたまへ。(略)『般舟讚』には、「信心のひとはその心すてつねに浄土に居す」と釈したまへり^⑪。

と述べる。

身は、此土にあるが、心は浄土に居す。ほろびゆく身をもちつつも、心は無生無滅の浄土を生きているのである。

この立場こそ、生と死の超越であり、この立場の教化こそ親鸞におけるデス・エデュケーションである。

- 1 一乗章第五(『大正藏』二二二九) このほか『梁撰經』に四種生死・七種生死が、『十二品生死經』には十二品生死が説かれていたが、二種生死を出るものではない。2 『大正藏』四六四四九 3 『真聖全』二六〇五 4 『同』二二二二
 - 5 『同』二二六〇六 6 『同』二二四六〇 7 『同』一一三一
 - 8 『同』二二七四 9 『同』二二六五六 10 『同』二二一〇三 11 『同』二二六六二
- △キーワード▽ 死、無生の生、即、横超、往生

(同朋大学助教授)